

《中学生の部 優秀賞》

「僕の身近な福祉」

有田市立文成中学校 3年

國中 くになか 翔太 しょうた さん

去年の冬休み、コロナのために長い休みとなった春休み、そしてこの夏休みの期間にお父さんの仕事の手伝いをしてきました。僕のお父さんは、長い間、サラリーマンをしてきていたのですが、5年前に体調をくずしたことをきっかけに会社を辞め、農業の仕事を始めました。僕のお父さんは、サラリーマンの経験をいかして、農業でも、違ったことにもどんどんチャレンジするんだということを言っていたので、その意味を確認するためにもいい機会になりました。

この有田という地区に居て、みかんを作る農業ではなく、あえて野菜を中心に頑張っています。作っているのは「ミニトマト」が一番多くて、他にも「なす」や「にんにく」、他にも「ブロッコリー」など作っています。最近はお父さんもいろんな人と関わりあっているようで、今年から「はっさく」「しらぬい(デコポン)」も頼まれて作るようになってきています。

お父さんのチャレンジについては、手伝いをしに行ってみないと分からないことが多くありました。その一つが、福祉施設の人たちと一緒に野菜を作ったりするということです。

これは、お父さんから聞いた言葉なのですが、『農福連携』という言葉があって、これは、農業と福祉の相性がよく、福祉施設で農業をやっていくことがいいんじゃないかということだそうです。お父さんの言う『農福連携』は、少し形が違うようで、お父さんのような農家が、福祉施設で働く人たちの仕事を作ってあげて、それが、一緒になって仕事をすることで、農業の仕事がたくさんできたらいいなというような考えてやっているんだそうです。

僕は、福祉に来る人たちは、何らかの障害を抱えているので、「暗い」「おとなしい」「人とあまり関りを持ちたくない」というイメージをもっていました。しかし、手伝いのほんの短い時間でのかわり合いであっただけですが、イメージは大きく変わることになりました。それは、初めて顔を合わせたときのことです。僕があいさつをしようとすると、彼らの方が先に、そして元氣よくあいさつをしてくれました。これまで、持っていた「暗い」「おとなしい」「人と関りを持ちたくない」というイメージではないということがわかりました。ただ、その後このことをお父さんに話をすると、「彼らは、僕たち以上に真剣にいろんなことを真正面から受け止めようと生きていると、今の世の中では、不合理なことたくさんあって、消化できず今のよう居てるんだよ。でも、僕たち以上にまじめに真剣に生きている人たちかもしれないよね。」と教えてくれました。まったくその通りだと思います。

別の機会には、お父さんといつも一緒に仕事をしている施設の職員さんともお話をしました。すごく明るくて、ばりばり仕事をする人で、素敵だなと思いました。それと同時に彼らが、障害を持つ人たちのための、働く場所を作ってあげているので、彼ら自身も明るく、元氣に仕事をするのができるのだと思います。彼らのする仕事でミニトマトを例にすると、彼らは全ての事(種をまく、育てる、収穫する、売るなどなど)を自分でやるこ

とは難しいけども、その中のこの部分を一緒にすることであれば、彼らはまじめにコツコツとしてくれるので、いい仕事をしてくれているとお父さんは言っていました。これからは、にんにくの種をばらしたり、植えたり、ナスの場合には、苗を植えたり、主柱を立てたり、収穫したり、売ったりを一緒にやりたいとお父さんは言っていました。そんな、休みの日のちよつとした体験でしたが、福祉というものが、身近に感じることで、僕の将来のために少しでもきっかけになればいいなと思いました。